

## 特集：徳島大学の医学教育を考える

## 女性医師と生涯教育

福島 泰江

徳島県医師会女性医師部会

(平成19年3月20日受付)

(平成19年4月4日受理)

## はじめに

最近大きく変化をとげている医療情勢の中、その数を増加させている女性医師に対しての期待は大きくなってきている。しかしながら、女性医師には過去から現在にわたって生物的・社会的性差が存在するため医師として仕事を続けることが困難となり離職している方々も多く存在している。このような中で女性医師の今後を見据えて「働きやすい環境づくり」を目指した徳島県医師会女性医師部会からの提言を執筆したいと思う。

## 1. 徳島県医師会女性医師部会の歴史とその活動

徳島県医師会女性医師部会は、平成14年6月に徳島県医師会の1部会として誕生した。部会長は桜井えつ先生で、現在会員数207名である。設立の目的は近年増加している女性医師、さらに10年以内に臨床現場で活躍する医師の半数が女性医師と推測されるなか、女性医師の労働環境を改善し「女性医師の働きやすい環境づくり」を目指している。設立以来毎年講演会を開催し各分野の先生方より御意見、御提言をいただいている。初年度は、日本医師会常任理事青野禮子先生の「21世紀は女性医師の時代か」、鳴門教育大学学校教育学部松葉口令子助教授の「男女共同参画社会を目指して」の講演会を開催し設立趣意の浸透徹底を目指した。

平成15年には性差医療の分野で第一人者の千葉県立東金病院天野恵子副院長に「性差を考慮した医療と女性医師」と題した講演をしていただき、以後性差医療の講演会を大学の先生方の協力を得て毎年2～3回実施し、まもなく20回を迎える。

平成16年には飯泉嘉門徳島県知事を講師にお招きし、「安全・安心とくしまの実現」という講演をしていただ

いた。同年には県内在住の女性4,000人以上にアンケートを実施し「女性医師の働く医療機関を知りたい」との強い要望があることがわかった。これにより最近徳島県の「医療とくしま情報箱」において女性医師の働く医療機関には桜井部会長をモデルにしたと思われるアイコンが付いている。

平成17年には若い女性医師・医学生を対象に「女性医師のキャリア向上のために」と題して熊本大学早野恵子先生に御講演いただき、ロールモデル・メンターの存在の必要性和連携の大切さを紹介していただいた。

平成18年度は11月16日に医療情勢の変化にともない、女性医師への期待が高まるなか「生涯いかそうあなたの才能・キャリア」と題して講演会を開催した。桜井部会長の基調講演のあと県内でご活躍中の各先生方より発表があった(図1)。パート1は、ロールモデルとして阿

講演会次第	総合司会	高橋智津子
挨拶と基調報告		
徳島県医師会女性医師部会部会長		
日本医師会男女共同参画委員会委員	桜井	えつ
パネルディスカッション	座長：福島	泰江・石本
パート1：医療現場で活躍中の女性医師からのレポート		寛子
1. 性差医療も目ざして活躍中		
阿南医師会中央病院・泌尿器科	山本	恭代 先生
2. 大学病院で働くということ		
徳島大学病院・眼科	四宮	加容 先生
3. 回り道をした後第一線で活躍中		
田崎病院・内科	廣瀬	千壽子 先生
4. 夫妻で仕事と家事を上手に分担中		
たかはし内科	高橋	安毅 先生
	高橋	浩子 先生
パート2：医療現場での上司・管理者からのレポート		
1. 完全2交代制勤務の実態		
徳島赤十字病院 小児科部長	吉田	哲也 先生
2. 公的(徳島県立)病院の勤務状況		
徳島県病院事業管理者	塩谷	泰一 先生
3. 臨床研修医の実態		
徳島大学卒後臨床研修センター長	北川	哲也 先生
4. 徳島大学における「女性医師ポジティブアクション」		
徳島大学病院院長	香川	征 先生
パート3：ディスカッション(フロアおよびパネラー相互)		

図1. 女性医師部会講演会次第(平成18年11月16日)

南医師会中央病院泌尿器科山本恭代先生，大学病院眼科四宮加容先生，田蒔病院内科広瀬千壽子先生，高橋内科高橋安毅先生・浩子先生ご夫妻の発言があった。パート2では，上司の立場から徳島赤十字病院小児科吉田哲也先生，徳島県より塩谷泰一病院管理者，徳島大学より香川征病院長，北川哲也先生の発表があった。このなかで香川病院長の「徳島大学の医学教育の目的は専業主婦を育てることではない」との一言が強く印象に残っている。

## 2. 女性医師・医学生を取り巻く現況

最近の統計資料によりますと全国的全医師数約27万人あたり，女性医師数の割合は16.5%と上昇し総数も約4万4千人となっている<sup>1)</sup>(図2)。なかでも20歳代においては3割強が女性医師となり第一線で活躍中である。医師不足が大きく取り上げられている小児科，産婦人科，麻酔科においても各学会での女性医師の割合は2割から3割となっている。しかしながらここ数年，医療技術の進歩や，医師と患者関係の変化，さらには新しく臨床研修医制度が始まり各科での医師不足が深刻さを増している。このような医療を取り巻く情勢の変化のなかで医業に携わらない医師，特に女性医師が注目され始めた。

徳島大学においては，平成8年からの女子入学者が約3割という状況が続いている。この若手女性医師の動向調査を大学で実施してみると，平成元年から16年までの卒業生362名中約18%の方が主婦，その他となっている<sup>2)</sup>(図3)。一昨年行われた徳島県内若手女性医師の就労継続意識調査においても結婚・出産を機に離職すると答えた人が1%，わからないと答えた8%の人を含めると

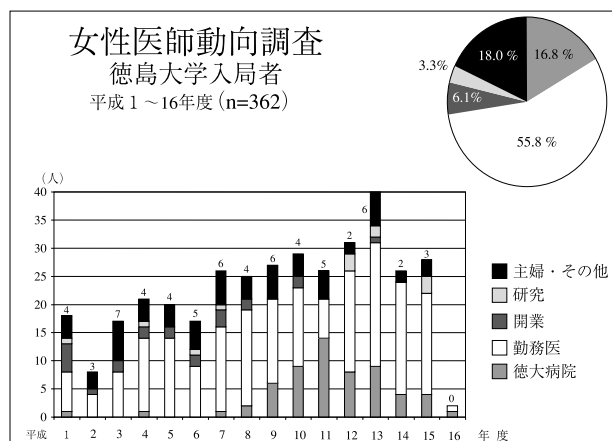


図3. 女性医師動向調査（徳島大学）

10人に1人は離職する可能性が大という結果であった<sup>3)</sup>(図4)。

全国の若手女性医師のなかで臨床に携わっていない人は4.8%であるのに対して，徳島大学のデータでは約5人に1人(18%)であること，またこの年代は25歳から40歳くらいと考えられ働き盛りの女性医師が多く離職していること，さらに医師一人を育てるには1億円以上の費用がかかることなどを考えると，大きな社会的資源の損失であり有効な活用が望まれることは当然のことと思われる。前述の働き盛りの女性医師の年齢は，結婚，出産，育児の時期と重なる。これらは女性医師にとって従来より就労継続の大きな障害であった。この生物学的・社会的性差の問題を解決していかなければ18%の離職率の改善はあり得ないと思う。私共は，さまざまな支援活動を通じて「可能なかぎり続けたい」と思っている先生方

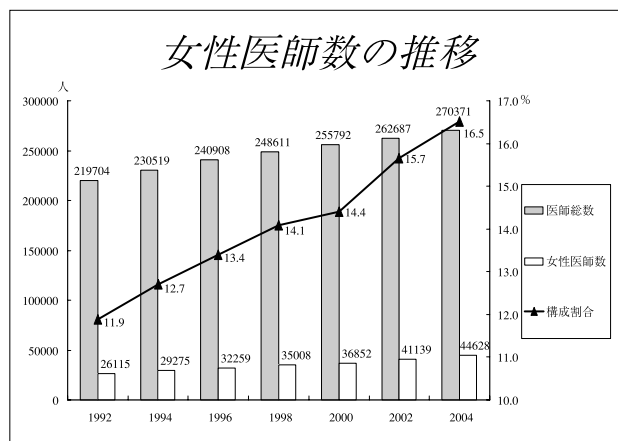


図2. 全国的女性医師数

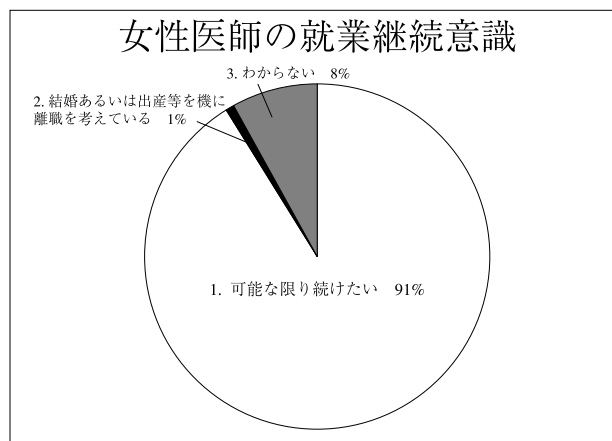


図4. 若手女性医師の意識調査

をサポートしていきますし、大学教育の場でも仕事を続けるという強い意志をしっかりと育てていただきたいと思います。

### 3. 各種の支援活動

以上のような現状のなかで女子学生・若手女性医師の就労には、本人のモチベーションの維持、パートナーや両親等身近な周囲の理解と協力、さらには社会的基盤の整備と活用があげられる（図5）。具体的には保育所の充実、これには時間外保育・病児保育の実施、病院内24時間保育所の設立等が考えられる。しかしながらこれらの社会的基盤の整備は医療関係者の努力のみではなかなか実現しにくく行政等との連携の強化が必要と考えられる。

労働時間については、最近頻回に公になっている勤務医の労働環境整備の問題と関連してくると思う。女性医師が短時間でも就労できる環境作りやワークシェアリングの活用、これには従来より主治医制を主体としている現在の医療界との十分な話し合いや患者の家族を主にした社会的認識全般の理解が必要と考えられる。

一時的に離職した後の就労復帰支援策としては、eラーニングの利用やドクターバンクの活用が考えられる。eラーニングは大学においてその利用が本格化しており今後利用範囲の拡大が望まれる。ドクターバンクは種々の団体で開設されており、つい最近では日本医師会で女性医師専用のバンクが立ち上がった。また徳島県医師会・徳島大学でも開設予定である。ぜひ多くの先生方に利用していただけることを強く望んでいる。

さらに、日本医師会男女共同参画委員会では、女性医師を雇用する立場の先生方の講習会を厚生労働省委託事業として企画し、平成19年1月より全国各地で「女性医師の勤務環境の整備に関する病院長、病院開設者・管理者への講習会」として実施している<sup>4)</sup>。徳島県でも本年中に開催予定である。

- 女子学生・女性医師の就労には
- 1) 本人のモチベーションの維持
  - 2) 身近な周囲の理解と協力
  - 3) 社会的基盤の整備と活用

図5. 女子学生・女性医師の就労継続のための必要条件

女性医師部会のホームページを充実し、女性医師・女子学生の相談窓口を開設したり、育児・家事の各種支援事業者の紹介も予定している<sup>5)</sup>。

### 4. 大学教育に望むこと

医学部の教育は年々進歩する医療レベルにあわせた先端技術の教育のみでなく、患者とのコミュニケーションを大切にすることやコメディカルとの協力関係をうまく築いていけるようにすることも大事なことと思う。医師は、医療をつかさどるだけでなく社会的使命を背負った職業であり、その充実感や満足感を伝えていくことも教育の一環ではないかと考える。医師という仕事は生涯続く仕事であり、日々の研鑽がとても大切であることを忘れてはいけないと思う（図6）。

#### 徳島大学の医学教育へ望むこと

- ・ 本人のモチベーションを高めるような教育
- ・ 医師は、社会的使命を背負った職業であるという意識を育てる教育
- ・ 医師という職業の満足感・充実感の伝達

図6. 徳島大学医学教育への期待

### おわりに

徳島県医師会女性医師部会の紹介と、現在女性医師の置かれている状況とその就労継続への問題点を指摘し、今後の支援事業についての提言をまとめた。現在、徳島県においては女性医師個人の努力によって就労継続がなっている。この状態を改善していくことが勤務医全体の待遇改善にもつながると確信している。近い将来、真の意味での男女共同参画社会が実現することを信じて、女性医師の皆さんが医師として仕事を続けていくことを切に願って終わりにしたいと思う。

この内容は第234回徳島医学会学術集会にて発表した。発表の機会を与えて頂いた徳島大学松本先生、泉先生、徳島県医師会馬原先生および、資料のご提供を頂いた徳島大学病院長香川先生に深謝いたします。

## 参考資料

- (1) 厚生労働省統計資料
- (2) 徳島大学によるアンケート調査
- (3) 徳島県医師会女性医師部会によるアンケート調査
- (4) 日本医師会男女共同参画部会資料
- (5) 徳島県医師会女性医師部会資料

*Medical life of women doctors**Yasue Fukushima**Tokushima Medical Association, Tokushima, Japan*

## SUMMARY

In the medical situation that is undergoing substantial changes recently, people expect more from the increasing number of women doctors. Since, however, females have been facing sex and gender differences, a large number of women doctors have difficulties in continuing their jobs. Given such circumstances, I look forward to the future of women doctors and present proposals by Tokushima Medical Association 'Josei Ishi-Bukai' aiming at better working environments.

Currently, in Tokushima Prefecture, the continuance of each woman doctor's work is solely based on her own efforts. I firmly believe that improving this situation leads to better labor conditions for men doctors as well. I look forward to the future of women doctors and present proposals by Tokushima Medical Association 'Josei Ishi Bukai' aiming at better working environments. I believe that we will create a gender-equal society in the near future. I wish all women doctors be able to continue their jobs.

Key words : women doctors, job, medical situation, working environments